広報いちはら「歴史を訪ねて」研修会

〔XXII〕

市原の造形物

飯香岡八幡宮の奉納絵馬

1997・10・5・SUN

市原市文化財研究会

對馬郁夫編

市原の造形物　飯香岡八幡宮の奉納絵馬

広報いちはら10月1日号「歴史を訪ねて」研修会

市原市文化財研究会

研修内容　1 プロローグ　絵馬の今昔　　對馬郁夫者

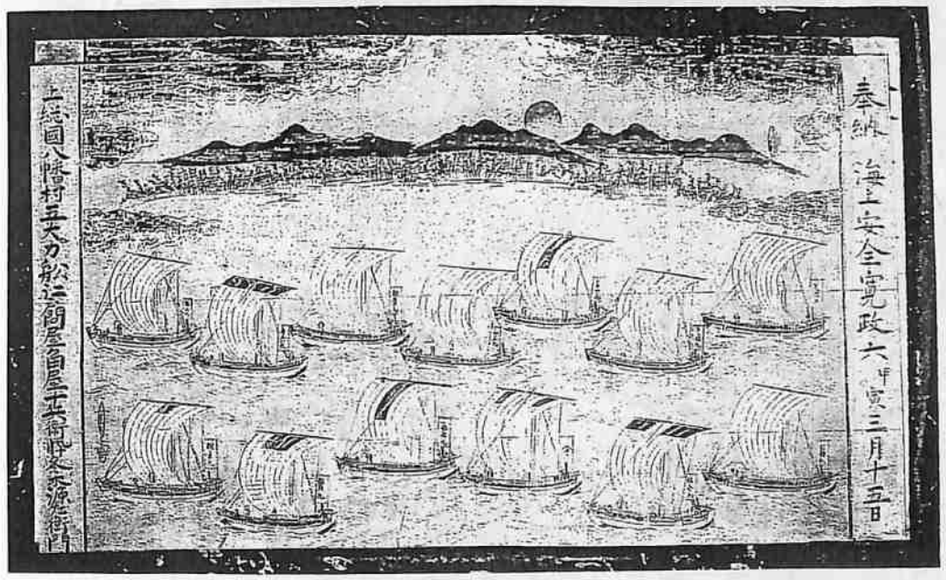
2 飯香岡八幡宮蔵絵馬

3 飯香岡八幡宮の本殿(国指定)・拝殿(県指定)について

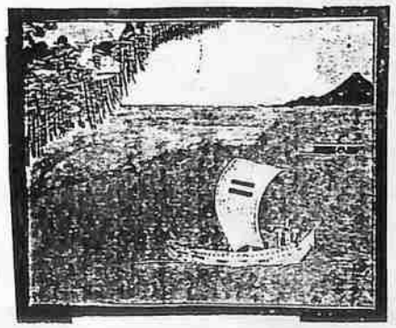
日　時　平成9年10月5日(日)午後1時30分

集合場所　飯香岡八幡宮社前

参加費　300円(保険料・資料代他)



五大力船と蒸気船

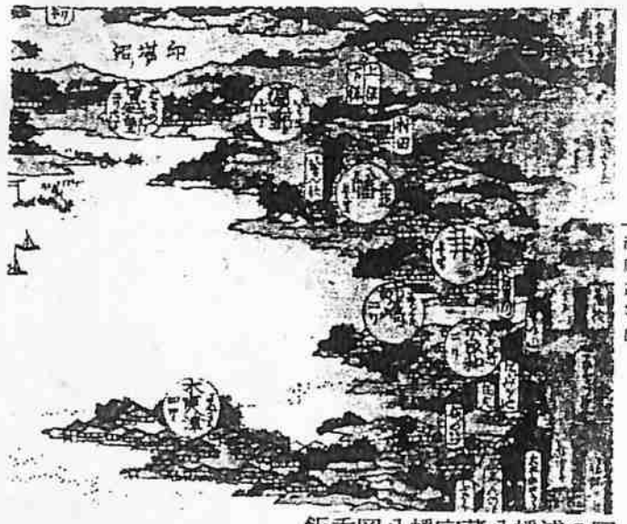


明治24年9月

五大力船勢揃い図の絵馬　寛政6年
(千葉県・飯香岡八幡宮蔵)

寛政6(1794)年、飯香岡八幡宮へ奉納された船絵馬。上部に山並み・日の出・松林等が描かれたほか、13艘もの五大力船が横一列に描かれている。水上の表情までもうかがうことができる等、極めて丁寧な描写である。

横浜市歴史博物館刊「海からの江戸時代」より

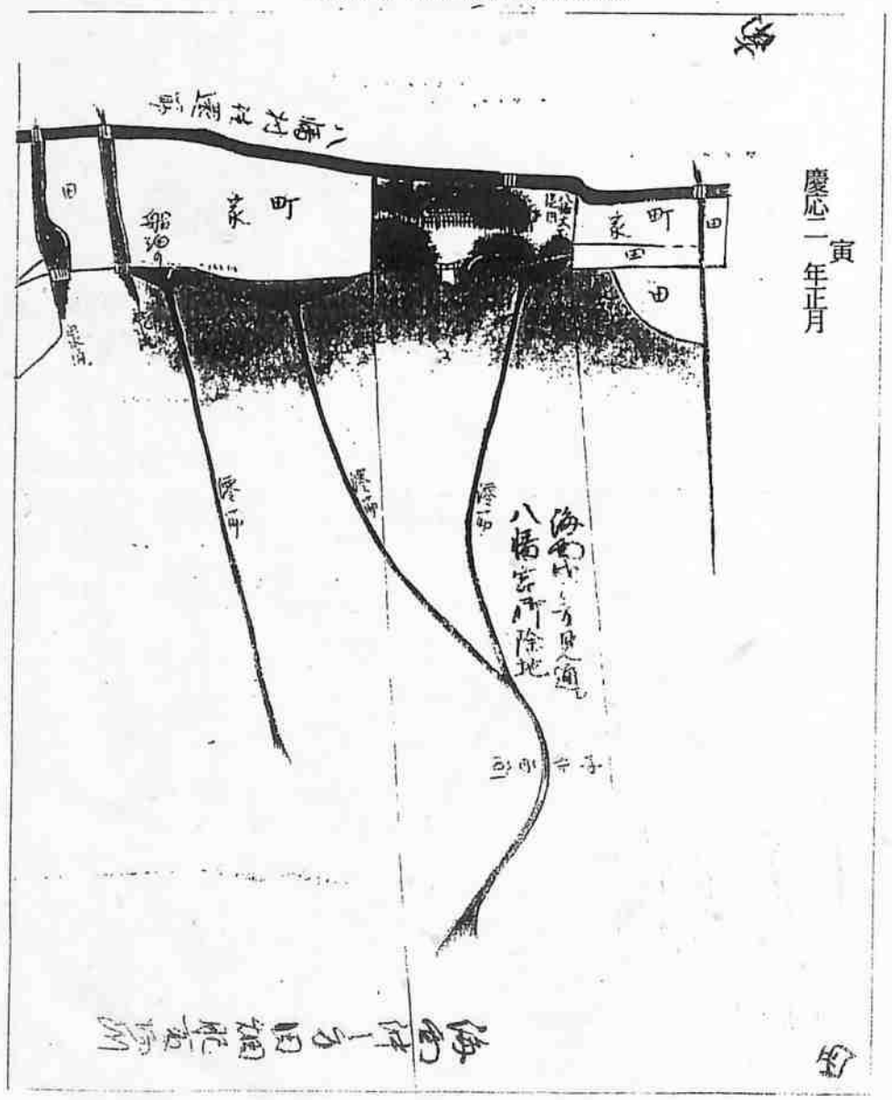


総房海陸勝景奇覧（八幡宿周辺の部分）
北斎　江戸時代後期
（千葉県・船橋市西図書館蔵）

江戸内湾の海浜部に位置する飯香岡八幡宮とその周辺（現・市原市）は、村田川や養老川の水運等を通じて周辺の穀倉地帯とも交易があった。木更津等とともに、江戸時代～明治にかけて米穀の積み出しで栄えた湊であった。

横浜市歴史博物館刊
「海からの 江戸時代」より

飯香岡八幡宮蔵八幡浦の図



飯香岡

飯香岡八幡宮について

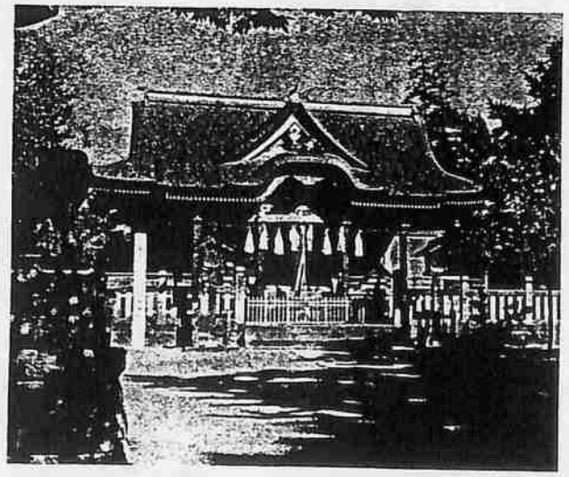
御影山神のめでにし飯香岡むかしをかけて世に匂ひけり

従一位　久我建通

飯香岡八幡宮の鎮座地は千葉県市原市八幡字飯香岡一〇五七番地で、往昔この地は御影山と称し六所御影神社が鎮座していたが、日本武命が御東征のとき相模国走水から上総国に渡りこの地に御着陣なされ、社地の前面の海浜風景を御賞覧なされたおり、社人のささげる夕の饗膳の飯の香を賞味せられて飯香岡と名づけられたという。

さてこの地に八幡宮が勧請された年代は正史には分明でなく諸説があるが、上総の国府の附近に放生の地を定めて勧請した一国一社の八幡宮で後に総社を兼ね国府総社八幡宮と称した。又一説に保元三年石清水八幡宮宮寺并極楽寺諸国庄園官符にみえる上総国市原別宮に擬せられている。

和名抄によれば上総国府は市原郡におかれたとあり国庁は旧市原村内に所在したものと推定され、同村内には国分寺趾もあり本宮とは三粁余の近距離にあり、官使往来の便に随って大社となった。



御祭神は誉田別命、息長帯姫命、玉依姫命、相殿に日本武命、足仲彦命、経津主命、猿田彦命、天穂日命、中筒男命、事代主命を奉斎し、摂社五社、末社十一社を算する。

神紋は十六弁菊花と五七桐を用い、例祭は現在でも大陰暦の旧八月十五日仲秋名月の日に行われる。

これは八幡宮最大の神事であった放生会が旧八月十五日行われていた関係である。

放生会は類聚三代格によれば国司監督の下に符を郡司に下し、郡司は百姓と共に放生すべき生類を一定の場所に買い集めおいて国司の監視に供して後に放生する儀式で、本宮の社地の前面は現在工業地帯化したが以前は東京湾の海水のよせた白砂青松の渚で袖ヶ浦と称した景勝の地で右に上総と下総の境をなす村田川が流れ放生会を行うのに適格の地であったので社地に選定されたのである。

中世以降権勢が武家の手に移ってからは八幡信仰はますます隆盛となり、東国に由縁の深い千葉、源、足利、徳川等の各武門武将の崇敬を得千葉常胤は社領を寄進し、源頼朝は社殿を造営し、足利義満は至徳元年神輿四基を寄進したが、現存している神輿の内部に鎌倉において上杉中務少輔朝宗入道禅助を奉行として造営寄進したことが墨書銘に残されている。長録年間に足利義政が社殿の造営を行い下って生実公方足利義明が自立する以前真里谷の武田氏に奥州より迎えられて、一時本宮の別当寺である霊応寺別称若宮寺に仮寓し後に館を設けて八幡御所と称して本宮を崇敬して社家様と名乗ったが、この義明家門繁栄を祈った奥書のある大般若経も残されている。

しかし戦国末期にいたり国内擾乱により本宮も社領は喪失し社殿は荒廃し社頭は衰微し苦難な時代を迎えたのであったが、ここに本宮諸般の整備を策した結果天正四年八月北条家より社殿修覆のための諸郷勧進、天正九年六月には守護不入新市開設の朱印状を附せられはしたものの目的達成の道はまだほど遠かった。ところが天正十八年五月北条攻略のため小田原に下った豊臣秀吉は禁制証文を附し、翌天正十九年十月徳川家康は自筆の寄進状をもって社領百五十石を安堵して祈願所と定め、文禄三年永井右近太夫をして社殿の宗修覆をなさしめるにいたり、ここ本宮は内容外観共に昔日の面目を回復し徳川累代の崇敬を得て明治にいたり県社に列せられた。

現在の社殿は銅板平葺きの権現造であるが重要文化財の本殿は和様を主とする入母屋造でもとはこけら葺きの単立であった。去る昭和四十二年解体復原工事のとき棟真束から建久三年源朝臣御再立也の墨書銘が発見されたが現本殿の建築様式や由緒記等により長禄文明ころの室町中期の再建と推定されるにいたった。

拝殿は千葉県有形文化財に指定され、江戸中期の元禄四年に建立されたことが墨書銘で判明した。堀飛驒守、大久保伊豆守等の勧進によるもので細部に江戸初期の建築様式を踏襲した跡がみられ、本殿の木割りの雄大にして簡素な建築に比し繊細華美な点が対照的である。

この拝殿の西側に御神木の大銀否がある。

八幡宮勧請のとき勅使季満卿が

君がため今日植添へし銀否に幾世経んとも神やどるらん

と詠じて御手植えされた記念樹と伝えられ落合直亮の筆になる歌碑が樹下にある。周囲約十一米老幹両両相対するをもって夫婦銀否と称し北斎漫画にもみえ、千葉県天然記念物に指定され千古の歴史を今日に伝えている。

本宮の特殊神事として柳楯神事がある。秋季大祭の前日国府のあった市原台地の氏子により柳の枝二十五本と

青竹五本で楯が作られ大祭早朝五所の氏子を通じて神前に奉納され、それから祭儀が始まり神輿渡御には柳楯が前行するのが古式例になっている。この古雅に富んだ神事は神輿以前の祭の形態を伝えるもの、神送りの一種、国府と本宮との関係を示すとかの諸説があるが他に類例稀な神事として千葉県無形民俗文化財に指定されている。

さて前記したが三十五年ほど以前の社頭は東京湾の海浜に接し自然味ゆたかな環境の中の神社で巨松が境内に林立し、昭和初期ごろまで八幡港より東京に廻航した五大力船の帰港する際の目標とされていた「八幡恋いしやはちまん様の森がみえますほのぼのと」と船人に唄われたものだったが、それも埋立による京葉工業地帯の造成により、今や一変し市街地内の神社となり、巨松も逐次枯死し夫婦銀杏と放生池とが昔日の面影を偲ぶよすがとなったが昔から安産、子育、殖産興業、厄除の神として広く信仰され、新住民の増加により新時代の息吹きと共に祭祀はますます盛大に厳修されつつある昨今である。

市原市八幡宿駅前通
飯香岡八幡宮社務所
電話 市原 〇四三六(41)二〇七二

絵馬の今昔

市原市文化財研究会顧問　對馬郁夫

（絵馬の祖形は生馬献納）

わが国における人と馬との関係が生ずるのは、５世紀頃と推定されている。古くから、神霊は乗馬姿で人界に降臨するものと考えられた。従って、馬は神の乗り物としてなによりも神聖視され、ここに生馬（神馬）献上の風が生じたのである。『常陸国風土記』香島郡の条に、崇神天皇の時代に鹿島神宮え馬一匹を献じたとの記載が見られる外に『続日本紀』天平宝字7年（７６３奈良期）５月の記述に、「雨乞いすなわち降雨祈願のため黒毛の馬を献納した」とあり、また、宝亀6年（７７５）１０月の頃には「日乞いの止雨祈願のために白毛の馬を献納した」とある。

この場合、黒毛は黒雲たなびき雨をもたらす呪術の色、白色はその反対呪法で、白日なわち太陽を意味するものであった。

また、生馬献上のかわりに、土や木あるいは石（滑石）などでつくった馬形を献上する習俗も一方で興ったのである。すでに『肥前国風土記』には、下田村の土をもって馬形をつくり、荒ぶる神を祀ってこれを和らげたという、興味ある記事が見えるし、『続日本記』にも、神護景雲3年（７６９）に、大神宮及び月並社に馬形を献上したとの記事があり、こうした馬形献上のことがしばしば文献に見られ、それを証明するかのように奈良県の耳成山麓膳夫遺跡をはじめ、県内では印西町の北の台遺跡（平安期）などかあらも土馬が出土するに至り、千葉県でも同時代に馬形献上の風があったことを知ることが出来る。

この土製馬形から木製馬形もあらわれ『延喜式』以降の文献には木馬献上のことが随所に記されている。馬形の生れた理由は、生馬献上の経済的負担の困難によるものであった。『類聚符宣抄』によると天暦2年（９４８平安中期）に丹生川上社（大和）と貴布祢社（京都）雨乞いの黒馬献上際し、繋飼料をつけられないものは板立御馬をもってこれをあてよと、右大臣藤原師輔が命じた記録がある。

板立御馬とは、奈良県の手向山神社の例に見る如く、木製馬形をさらに簡略化し、板を馬の形に切り抜いて彩色すると共に、それが立つように台をつけたものであった。

（絵馬の誕生）

板立馬がより簡略化されたものが絵馬であり、絵馬は板片に馬の絵を描けばそれで足りたのである。江戸時代に著わされた『神道名目類聚抄』や『神社啓蒙』という書物にも、生馬を献上できないもの、馬形をも造り得ないものが馬の絵を献上したことにはじまると絵馬のおこりについて述べている。しかし、その年代については案外に古く、すでに奈良時代に絵馬の実物を見ることができる。

すなわち、静岡県浜松市伊場遺跡の奈良時代末期の地層から縦７．３センチ横９．０センチ厚さ０．５センチの小型絵馬が発見されている。桧の薄板に左向きの馬の姿を墨で描き、上部中央に紐穴が見られる。なお、昭和３５年浜松市教育委員会がまとめた「伊場遺跡発掘調査報告書」によると、馬形１１点と絵馬６点の出土を報じている。さらに、伊場遺跡では７世紀から８世紀初頭と推定される須恵質の陶馬や奈良時代の土師質の土馬なども検出されている。

これらの事例に照らし、生馬献上、馬形献上、板立献上、絵馬献上の風は、段階的にながい年代を経て出現するのでなく、比較的年代を接して現われ、時には馬形献上と絵馬献上とが併立していたとも推察される。

ともあれ、絵馬に統一されても人々は、生馬献上と同じ意識でこれをとらえていた。山形県の成島八幡宮に奉納された天文２２年（１５５３．室町後期）銘．赤湯薬師寺の弘治２年（１５５６）銘．福島の田村神社の元亀元年（１５７０．室町後期）銘、同２年銘の神馬図絵馬には奉上．奉懸あるいは御宝前の文字と共に「神馬一疋」．「馬形一疋」の銘文を見る外、石川県七尾の松尾天神社の絵馬の如きは、享保２年（１７１７．江戸中期）銘の菅公図にさえ「絵馬一疋」と記していることからも、人々の絵馬に寄せる意識を知ることができるのである。

〔絵馬の大型化〕

絵馬はその大きさから小絵馬と大絵馬とに分類される。一辺が約３０センチ以下のものが小絵馬で、これ以上大きいものを大絵馬と呼んでいるが、形態から見れば小絵馬は吊懸式で、これに対し大絵馬の場合は偏額形式のものといわれている。

岩井宏實氏は、その著『絵馬』のなかで、『年中行事絵巻』や『一遍上人絵伝』など中世の絵巻物に描かれた絵馬を取り上げ、平安末期から南北朝にかけての絵馬は、小絵馬が主流あったと指摘しさらに「室町末期から絵馬の大型化がすすむが、それが遍額形式となり、ことに豪華になりはじめるのは桃山時代のことである」と記している。また、室町時代中期になると、馬の図柄も変化すると共に、祈願内容を描く図、信仰祈願の対象となる神仏像や眷族の類を描く図があらわれたり、一方では祈願内容や奉納対象とは無関係な図柄が登場するなど、各時代の世相なりを反映し、図柄が複雑多様化する。

さらに、蒔絵や彫物貼付絵や高浮彫絵の技法が採用されたり、専門絵師や著名画家が筆をとるなど、絵馬が美術作品化する傾向を強めた。

ちなみに、県内最古の絵馬は、安土、桃山時代にさかのぼり、天正７年（１５７９）板絵馬著色武者絵（牛若丸と弁慶）の２面で、大網白里町の懸神社蔵（県立上総博物館保管）の県指定の作品である。

絵馬奉納の風習が盛んになり、しかも大型化するにつれて、それを収容するための特定の建物が必要に迫られ、ここに絵馬堂が成立する。

絵馬堂成立の正確な年代は不明であるが、造営年代の最古例は慶長１３年（１６０８）豊臣秀頼（秀吉の第２子）が造営した京都北野天神宮の絵馬堂といわれている。

県内における絵馬堂の代表例は成田山新勝寺の額堂である。

７代目市川団十郎が金１，０００両を寄進し文政４年（１８２１）に建立されたものであるが、昭和４０年６月１８日に惜しくも焼失するに至った。現存の額堂は文久元年（１８６１）に建立されたもので、国重要文化財に指定されている。

{小絵馬の流行}

つぎに、江戸時代も後期の化政期（文化．文政）の頃になると庶民的願望をこめた小絵馬が爆発的に流行し、安産、育児、婚姻、商売繁盛、災厄除け、病気平癒などの願いごとを、様々な画題で描き、寺社に奉納された。泥絵具といわれる胡粉を基調にして、墨．群青．丹．黄土．などの素朴な色調にも庶民文化を感じさせ哀歓をにじませた素朴な民間信仰の諸相を物語っている。

{現代の絵馬}

ところで、小絵馬の奉納はなぜか大正期を境いに、昭和期に入ると徐々にその姿を消し、戦後の混乱期を経て、高度経済成長期に向うや加速度的に衰退の一途をたどったのである。

しかるに、昭和４４年の頃、東京の平和島で絵馬展が開催されたのを契機として、再び絵馬ブームが起り、印刷された量産の小絵馬が人気を呼び、正月や受験シーズンなどの特定の時期ともなると地方の神社に至るまで、安産．家内安全．縁結びや合格祈願などの祈願内容を記した文字絵馬等の奉納が盛んに行なわれ、今日では折々の風物詩ともなっているといえよう。

{県内で活躍した絵師たち}

① **狩野派**（初代狩野正信）　狩野栄信、　狩野昌信、　狩野安信、

安信は狩野派８世（中橋狩野家）とされる正統派の人物、安信の門人に英一蝶がいる。　川名楽山（敬信）は安房郡沼村（現館山市沼）の出身で狩野派の岡島素岡らに学び、その作品は県南地域に集中。今村晴雪も狩野派の一人で勝川院雅信の門人。

② **文晁派**　（初代谷文晁）谷文晁、その子文二。佐竹永湖は文晁の門人。佐倉の人で明治の洋画家**浅井忠**を指導した黒沼槐山も文晁派。

③ **菊池派**　（初代菊池容斎）容斎の門人松本楓湖。

④ **堤派**（初代堤等琳）**３代等琳**（本姓月岡吟三．初号秋月）は雪山．雪館とも号し、みずから雪舟１４代の筆孫と称して一家をなす。

堤秋月．堤等木．堤等栄．堤等山．初代の門人として堤等舟．堤等義（姉崎斎雪山堤等義）は、地元姉崎のこま辰の出身．３代の系統。

⑤ **歌川派**（初代歌川豊国）豊国（浮世絵界の中枢）。初代の門人で後に３代豊国を名乗る歌川国貞．その国貞の門人歌川国年や２代歌川国信。国貞と共に豊国門下の双重とされる歌川国芳．国芳の門人も多く月岡（大蘇）芳年をはじめ、歌川芳信。この外初代歌川豊国の門下としては、歌川国安以下、歌川国直、歌川国種など．安藤広近は風景画で有名な**歌川（安藤）広重**と同様に歌川豊広に学んだ絵師。

{昇亭北寿}　宝暦１３～文政７（１７６３～１８２４）江戸後期の浮世絵師。名は一政。葛飾北斎の高弟。師の洋風風景画の分野の継承者として浮世絵で活躍した。県内の絵馬は、いずれもその年代から２代目と考えられる。長亭徳寿はその門人。

⑥ **鳥居派**（初代鳥居清信）２代鳥居清倍は鳥居風浮世絵の完成者。３代目、鳥居清満。鳥居清忠は４代清長の門人。

⑦ **その他**　永峰粥、雪洞昌信、望月東雲、小川半窓、東雲斎一心、菱川英信三笠道者、弓削一酔、泰山樵夫などは地元の絵師。

（市原市内所在絵馬の絵師調査）

［１］ 嶋穴神社（島野）

① 昇亭御山　② 昇亭北寿　③ 桜井知寿　④ 徳寿（長亭）

⑤ 雪山堤寿月　⑥ 堤栄門　⑦ 長亭徳寿（２点）

⑧ 堤等国　⑨姉崎斉堤等義（雪山）

⑩ 雪舟十四世等琳門人雪山堤寿月

［２］ 日吉神社（府中）

① 雪舟十四世雪山等琳門人堤等国　②昇亭北寿

③ 堤等国　④ 堤栄川

［３］ 飯香岡八幡宮（八幡）

① 雪山堤等琳（３代）　② 堤栄川　③昇亭北寿

④ 堤秋泉　⑤ 堤等栄　⑥ 等舟（堤等舟）　⑦ 堤等国

⑧ 等園（堤等園）　⑨ 探秀藤原守雄

［４］ 光善寺薬師堂（向台）

①昇亭北寿　② 石田昌之

［５］ 雷公神社（分目）

①姉崎斉雪山堤等義

［６］ 若宮八幡神社（北青柳）

①昇亭北寿

［７］ 西願寺（平蔵）

① 宮田一学

⑧ 高滝神社（高滝）

① 静々堂赤渓

⑨ 鷲神社（今津朝山）

① 藤松

⑩ 大宮神社（五井）

① 昇亭北寿（２点）

⑪ 三島神社（牛久）

① 昇亭北寿（２点）

※ 昇亭北寿（２代目１０点）

［参考引用文献］

① 岩井宏實．山崎義洋　『絵馬』　昭和５５年　保育社

② 千葉県文化財実態調査報告書一絵馬．奉納額．建築彫刻一　１９９６年　千葉県教育委員会

③ 大網白里町の絵馬　平成８年　大網白里町教育委員会

④ 島穴神社所蔵　奉納絵馬額一覧　平成７年　島穴神社社務所

⑤ 常石英明　書画骨董人名大辞典　昭和５７年　金園社

飯香岡八幡宮社殿

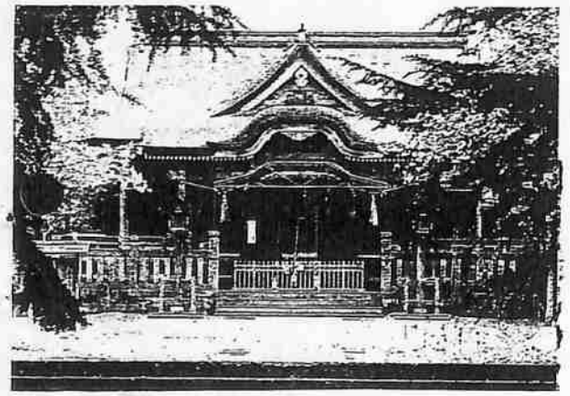
（市原市教育委員会刊「いちはらの文化財」より）

飯香岡八幡宮本殿（いいがおかはちまんぐうほんでん）

〈八幡1057－1〉国指定

[illegible]年間の創建とされ、また一国一社の国府八幡宮とよばれる由緒ある古社です。正面3間・側面2間の[illegible]、屋根は流板葺の入母屋造です。太い木組や組物・彫刻・面取角柱などの部材は力強く簡素で、室町時代末期の特色をかもしています。県内の神社建築で重要文化財に指定されているのは、香取神宮本殿と本社のみです。

〈交通〉内房線八幡宿駅下車徒歩3分。



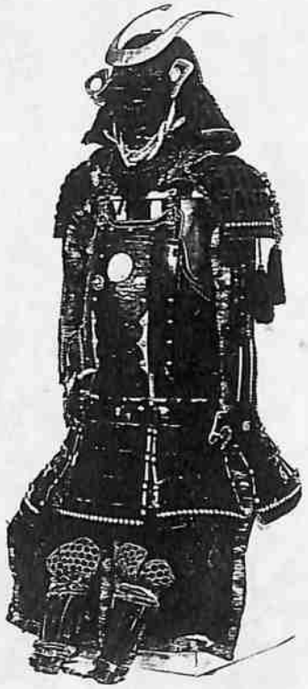
飯香岡八幡宮拝殿（いいがおかはちまんぐうはいでん）〈八幡1057－1〉県指定

正面5間・側面3間の[illegible]に正面1間の[illegible]が付き、本殿と同様に[illegible]の建物で、[illegible]によって本殿と接続される、いわゆる[illegible]造の形式を取っています。屋根は流板葺の入母屋造で、正面に唐破風及び千鳥破風が付いています。細い木組、彩色された[illegible]・木鼻・蟇股内陣彫等、本殿にくらべて華麗です。現在の建物は墨書銘によって元禄4年（1691）に再建されたことがわかりました。

〈交通〉内房線八幡宿駅下車徒歩3分。

①

②



③

平成九年十月五日
広報いちはら『歴史を訪ねて』
飯香岡八幡宮の奉納絵馬
對馬郁夫
発行　市原市文化財研究会
会長　小川八紀
編集　広報部
責任者　瀧本平八
事務局　局長　小川正夫
市原市青柳七七六の一
電話　二一一一四〇五